Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-29

黄遵憲「日本雑事詩」訳注稿（二十六）

林, 香奈
劉, 雨珍

(Citation)
未名,40・41:153-185

(Issue Date)
2023-01

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100488494

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488494

黄遵憲「日本雑事詩」訳注稿（二十六）

林　香奈
劉　雨珍　訳注

A　「其百八十六」

初胎花事趁春融　初胎の花事は　春融を趁う
祝語丁甯休洗紅　祝語は丁寧なり　紅を洗うを休めよと
一道裙腰頻結束　一道の裙腰　頻りに結束し
盡將桃杏嫁東風　尽く桃杏を将って　東風に嫁せしむ

［韻字］融・紅・風（上平一東）

B　①**初胎花事**　初胎とは花がつぼみを含み始める状態。花事とは開花の状態。唐の司空図『二十四詩品』精神に、「明漪　底を絶し、奇花　初めて胎す」とある。また北宋の胡寅「春日幽居示仲固彦沖十絶」其六に「花事は先ず桃李従り来り、海棠紅杏即ち相い催す」（『斐然集』巻四）とある。　②**趁春融**　春になって氷や雪が溶けて和らいだ様子。唐の羅隠「春日湘中題岳麓寺僧院」詩に「春の融くるは只だ乾坤の酔えるを恐れ、水の闊きは深く世界の浮けるを知る」（『文苑英華』巻二三九）とある。　③**祝語**　祝福の言葉。唐の沈亜之「祠漢武帝祈雨文」に「巫人に因りて以て其の祝語を達す」（『文苑英華』巻九九六）とある。　④**丁**

宵　懇切。注意深く念入りであること。杜甫「漫興九首」其一に「即ち花をして開かしむること深く造次し、便ち鶯をして語らしむること太だ丁寧なり」（『杜工部詩集』巻七）とある。⑤**休洗紅**　魏晋時代に伝わる古楽府の曲名。「休洗紅」其一に「紅を洗うを休めよ、洗うこと多ければ紅色淡し。……人寿百年は能く幾何ぞ、後に来る新婦　今は婆と為る」（『古詩紀』巻五十三）とある。⑥**一道裙腰**　一道は一筋の意。裙腰はスカートの腰に巻いて結ぶ部分。白居易「杭州春望」詩（『白氏文集』巻二十）に「誰か湖寺の西南路を開く、草緑にして裙腰一道　斜めなり」とある。⑦**結束**　紐や縄などで結んで束ねること。梁の庾肩吾「詠美人」詩に「能く結束するに関するに非らず、本より自から細き腰肢」（『芸文類聚』巻十八）とある。⑧**桃杏嫁東風**　北宋の張先の詞「一叢花令」に「恨みに沈みて細かに思う、桃杏の猶お解く東風に嫁ぐに如かず」とあり、欧陽脩に「桃杏嫁東風郎中」と呼ばれた（范公偁『過庭録』）。「嫁東風」は李賀「南園十三首」其一に「憐む可し　日暮れて嫣香落ち、春風に嫁与して媒を用いず」（『李賀歌詩集』巻一）に基づく。

C　春の足元を追いかけるように、花がつぼみを含み始め開花の季節を迎えた。雨で花を落とさないようにと、懇切に祈りの言葉を捧げる。処女のスカートの腰紐を探して樹木に繋いでおくと、桃や杏の花が春風に嫁いだ如く、無数の実が結ばれた。

D　力めて農学を求む。欧洲の植物家に雌雄配合法と曰う有り。花果草木も、亦た交合して而る後に子を結ぶを謂う。凡そ蕊の中に含む所の黄粉は、蜜を用いて塗坿すれば、則ち花さく時に風雨もて傷われず、粉は厚くして実は倍繁し。文昌雑録を考うるに、称するに、一媒姥の杏花多きも実らざるを見て、曰く、来春与に此の杏に嫁了せんと。乃ち処子の裙一腰を索めて杏上に繋ぎ、既にして酒を奠し呢喃して頌祝するに、果して子を結ぶこと無数な

りと。蓋し亦た酒漿膏を以て之を粘し、但だ託するに神巫を以てし、而るに其の理に通じざるのみ。

E　①欧洲植物家有曰雌雄配合法　オランダ人の農学者ダニエル・ホイブレンク（Daniel Hooibrenk、一八一三～一八九五）の原著 *Method of Cultivation, Explained by Three Different Processes* を津田仙（一八三七～一九〇八）が明治七年（一八七四）、『荷衣伯連氏法（ホーイブレンガ）　農業三事』として訳して刊行し、日本の農業関係者に紹介した。上巻は「気筒」（気筒を地中に埋めて田畑を肥やす法）、「樹枝偃曲」（草木の枝を曲げて枝の力を削ぎ幹の力を増大させ、花や実を成熟させる法）などについて、下巻は「雌雄配合法」（人工的に草木の実を結ばせる法）について、図解付きで説明している。『荷衣伯連氏法　農業三事』巻之二「人工を以て草木の実を結ばしむる事」に「夫れ草木も動物の如く雌雄ありて、花の開（さ）きたる時、皆夫々（それぞれ）に交媾（こうこう）して、実を結ぶこと猶人類の懐妊せるに異ならず。草木ともに、一花の内に、雌雄の蕊を具ふるもの（雌雄両全花）多し。花心に在てその頭に、蜜を帯着（おび）たるものハ、雌蕊なり。又其周囲に、黄粉を帯着たるものハ、雄蕊なり。又一根樹（いっぽんのき）の内に、雌花・雄花を共に具ふるものあり。又雌木、雄木と全く其根を殊にするものあり。（中略）荷氏農業三事の内にて、最も世に利益ある発明ハ、草木の花開きたる時、雌蕊雄蕊の交媾を媒酌し、実を多く結ばしめ、且善く豊登（みのら）しむるの工夫なり」とある。黄遵憲は『日本国志』巻四十「工芸志」の「農事」の条で詳しく紹介している。補注G①参照。　②**文昌雑録**　北宋の龐元英の撰で、主として尚書省での見聞を記録。この話は『文昌雑録』巻一に見える。原文は補注G②参照。　③**媒姥**　仲人婆さん。　④**呢喃**　『玉篇』巻五「口部」に「呢は呢喃なり。小声にして多言なり」とある。劉兼「春燕」詩に「多時　窗外　語は呢喃にして、只だ佳人の繍簾を捲くを要す」（『全五代詩』巻十六）とある。　⑤**酒漿膏**　酒の上にぎらぎらと浮き上がっているもの。酒膏（さかあぶら）。

F　日本は農学の知識を熱心に求めている。ヨーロッパの植物学者が雌雄配合法というものを発明した。その原理

は、花や果物、草木などもすべて雌雄の交合を経てから種を結ぶことを言う。およそ蕊（しべ）の中に含まれる黄粉を蜜で塗っておくと、開花の時に風雨に遭っても傷つけられず、花粉が厚くて実が二倍に茂る。『文昌雑録』を調べてみると、次のような話がある。ある仲人婆さんは、杏の樹に花が多いのに実がないのを見て、「来春はこの杏に嫁をやろう」と言った。そこで処女のスカートの腰紐の部分を探して杏の樹に繋ぎ、それから酒を備えて、むにゃむにゃと祈りの言葉を捧げると、果して無数の実を結んだという。恐らくこれもまた酒膏（さかあぶら）で花粉を固めたのであろうが、ただ巫女に託するばかりで、この道理に通じていなかっただけのことなのである。

G　①『日本国志』巻四十「工芸志」の「農事」の条に以下のように見える。

近世農学家於欧洲得三新法、一曰気筒。（中略）一曰樹枝偃曲法。（中略）一曰雌雄配合法。凡花果草木、皆有雌雄、亦交合而後結子、以蜜為媒助、則結実較盛、而収穫倍常。（草木之類、有一花内具雌雄双蕊者、花心中如蜜者為雌蕊、其周囲所帯黄粉為雄蕊。如麦之類、毎花具雌蕊二、雄蕊三。稲之類、毎花具雌蕊三、雄蕊六。梨及林檎毎花具雌蕊五、雄蕊二十、是皆一花而具雌雄者。若玉黍、胡瓜之類、又薯蕷、銀杏之類、則雌花、雄花、雌木、雄木、根性全別。其配合之法、雄蕊所含黄粉為風鼓盪、与雌蕊之蜜粘著、然後結実、故花時遇暴風雨、則粉褪而実稀。法用尋丈麻縄、以羊毛為辮、長約尺許、横排条繋、毎十条中繋以鉛丸、使其力下墜、再用蜜薄塗於辮及鉛丸之上、軽軽摩擦以期遍潤。如麦圃花時、命農夫三人引牽此縄、横綽而過、所有外散花粉、必粘於辮、与雌蕊相触、則花粉与花心相粘矣。其収穫比尋常可多至一二倍。近歳法国有売此器者、五穀之類皆可用。若梅杏花時、直以蜂蜜塗於花、則其効可計日而待。自荷衣伯連創此法、種植家多効之。荷衣伯連又言、凡一樹而雌雄各別、雖相隔甚遠、亦能以気相合。欧洲中有一種葎草、製麦酒者用之為味、其草有雌有雄、一経交合則香薄味遜、人見雄草輒芟除之、若有一根雄蕈、雖隔数里外経一二時百万株之雌草悉結実而無用矣。故種此草者結為会社、毎家毎戸時時検査、専以除去此害為務。

又如麻苧之類、貴於本質堅靭、亦宜分別雌雄、禁其交合、其理蓋如騸宦牛云。是又一理、附識於此。）試之皆有験。（中略）維新之後、国家既開勧農局、復設植物園、時以新法刊告於衆、風気為之一変。

②龐元英『文昌雑録』巻一所収の原文は以下のとおり。

礼部王員外言、昔見朝議大夫李冠卿、説揚州所居堂前杏一窠極大、花多而不実。適有一媒姥見如此、笑謂家人曰、来春与嫁了此杏。冬深、忽携酒一樽来、云是婚家撞門酒、索処子裙一腰繋杏上、已而奠酒、辞祝再三、家人莫不笑之。至来春、此杏結子無数、江淮亦多有嫁橘法、不知是何術也。

A 「其百八十七」

採取頭春到尾春　頭春を採取して尾春に到る
猩紅染色様翻新　猩紅（しょうこう）の染色　様翻（かえ）りて新たなり
自過穀雨茶船到　穀雨を過ぎて自り、茶船（ちゃぶね）到り
先揀龍團贈美人　先ず龍団（りゅうだん）を揀（えら）んで　美人（アメリカじん）に贈る

［韻字］春・新・人（上平十真）

B ①**頭春**　穀雨前後に採る新茶。その年の最初に生育した新芽を摘み採って作ったお茶。自注D参照。②**尾春**　大暑前後に採るお茶。自注D参照。③**猩紅**　猩猩緋（しょうじょうひ）の色。黒みを帯びた鮮やかな紅色。唐の趙鷟鸞「纖指」詩に「昨日琵琶の弦索の上、分明なり　満甲　猩紅に染む（『全唐詩』巻八〇二）とある。④**様翻新**　新しい様式に様変わりすること。ここでは紅茶にすること。宋の釈紹嵩「贈聞人必大」詩に「文を属するに新様翻るを想見し、巻を執るに猶お寸陰を惜しむを聞く」（『江湖小集』巻六）とある。⑤**穀雨**　二十四節気の一つ。四月二十日前後。穀物を育てる雨の意。唐の崔国補「奉和聖製上巳祓禊応制」詩に「桃

花　春尽きんと欲し、穀雨　夜来收む」（『全唐詩』巻一一九）とある。⑥**龍團**　宋代の皇帝専用の上等茶。円餅のような形をして、龍の模様が付けられている。「龍鳳茶」とも。欧陽脩「送龍茶与道人」詩に「我　龍団の古き蒼璧のごときもの有り、九龍の泉は深きこと一百尺。君に憑みて井を汲みて試みに之を烹よ、是れ人間の香味色ならざらん」（『欧陽文忠公集』居士集巻九）とある。⑦**茶船**　近世、江戸・大坂などの河川や港で大型廻船の貨物の運送に用いた小船。

C　穀雨前後の頭春から大暑前後の尾春までのお茶を摘み取り、その葉っぱは加工により猩猩緋のような紅茶色に様変わりする。穀雨が過ぎた頃から貨物運送の小船が出入りし始め、まず龍団のような上等な茶を選んで、アメリカに輸出している。

D　産する茶は山城国を以て最も佳しと為す。緑湯は惟だ美利堅人のみ喜んで之を購い、欧羅巴人は欲せざるなり。近年西商有りて中人を延きて紅茶を製らしむるも、味薄く、遠く我に如かず。産製は日に多く、価は騸かに賤し。日本出口の貨、茶は最も大宗を為し、歳に銀銭四百万円を得可し。美人　之を購うこと十の七八と云う。穀雨前後の採る所、名は頭春、大暑前後を名は尾春と曰う。皆な横浜に運び来りて、再び装いて出口す。其の製造方法、価値数目は、別に物産志の中に詳らかにす。

E　①**山城国**　旧国名の一。現在の京都府南東部にあたる。②**緑湯**　緑茶。③**美利堅**　アメリカの漢訳。黄遵憲らが来日した明治十年（一八七七）、山本義俊纂訳『美利堅輿地誌略』が好書館より刊行されている。④**欧羅巴**　ヨーロッパの漢訳。

F　茶は山城国の産が最も優れている。緑茶はただアメリカ人が好んで買うのであって、ヨーロッパ人は好まない。近年、中国人を招いて紅茶を作らせる西洋の商人がいるが、味が薄くて、中国産には遥かに及ばない。生産量が日に日に多くなるに連れて、価格も急に安くなっている。日本の輸出品の中で、茶は最も大きな比重を占めており、毎年銀四百万円を獲得できる。アメリカ人はその七、八割を購入しているという。穀雨前後に採るお茶を頭春と言い、大暑前後に採るお茶を尾春と言う。それらはみな横浜に運ばれてから、新たに荷造りして輸出している。その製造方法や価格、数量などは、「物産志」の中で詳しく述べている。

G　『日本国志』巻三十八「物産志」一の「茶」の条に以下のように見える。

若製茶之法、則近来較精（自注略）、有曰宇治製（……凡穀雨前後所採者為頭春、葉肥嫩而味濃厚。夏至前後所採為次春、葉老而味薄。至大暑前後所採為尾春。毎年出産、頭春居其六、次春居其三、尾春居其一云）、有曰玉露製（自注略）、尤擅香名。其製造較粗者曰番茶（自注略）、碎屑者曰粉茶。近年以来学製紅茶（明治七年、勧業寮創編紅茶製法一書、頒布諸府県、民間始有学製者。八年、駐劄上海領事官特聘我国人二名於肥後之山鹿、豊後之木浦等処学製、而未能得法。又遣委員多田元吉往湖北、江西、安徽等処学習栽培、製造諸法、並購覓良種齎帰。其後日本三井銀行與一西商又延諸華人四十余名於近江大津郡製造、初頗如法、後以製造過多不能得利云。）又学作磚茶、又有学作印度茶者（自注略）。日本産茶遍於全国、以宇治為最良。開港之先、惟中国商人於長崎購九州茶回国、再製以充西商之用。又有和蘭商人齎茶樹五百本移植於爪哇、然西人未有購茶者。及安政六年横浜開港、米国商人始稍稍購茶、此時茶一百斤不過六七円、後増至十六七円、其後輸額遞加、栽植益盛。至明治二、三年、適因中国紅茶有偽造者、為美人所厭忌、而日本緑茶乗機得以銷售、至明治十一年輸出至二千八百余万斤之多、售於美国者十之九、於英国者十之一。然以製造稍濫、得利転微、政府頻年設法維護、於明

治十二年開共進会、凡出品者八百四十六家、一千一百七十二品。特撰委員審査其形状（自注略）、色沢（自注略）、火度（自注略）、水色（自注略）、茶滓（自注略）、香（自注略）、味（自注略）、收蔵（自注略）、価格（自注略）、性質（自注略）、原価（自注略）、分別八等以定優劣。其尤者給以賞牌、民人奮励争進、其豪農富商自種茶園、有辟地五十余町之広、製額二万余斤之多者、比之従前大有進境云。

その後に「茶歴年輸出価量表」と「三種茶合計比較表」を附し、明治元年から明治十一年までの「製茶」、「番茶」、「粉茶」の輸出量と価格などを明記している。

A　「其百八十八」

四繭繅成弱縷奇　四つの繭もて繅ぎ成す　弱縷の奇なるを
海西爭購舶來時　海西　争いて　舶来を購う時
都從素手織織出　都て素手の織織たる従り出づ
跪樹傳誇女歐絲　樹に　跪き　伝えて誇る　女　糸を欧くを

［韻字］奇・時・絲（上平四支）

B　①**弱縷**　細い糸。梁の沈約「詠甘蕉詩」に「流甘　椰実を捻い、弱縷　絺衣に冠たり」（『芸文類聚』巻八十七）とある。②**海西**　海のかなたの西方。また、そのあたりの国。『後漢書』西南夷伝「哀牢夷」に「自ら我　海西の人と言う、海西は即ち大秦なり」とある。③**素手織織**　細くてしなやかな白い指。『文選』巻二十八「古詩十九首」其二「青青河畔草」に「娥娥たる紅粉の粧い、繊繊として素手を出だす」とある。④**跪樹傳誇女欧絲**　自注Dにあるように、『山海経』巻八「海外北経」に見える言葉。『説文解字』に「欧は吐なり」とある。

C　四つの繭からすぐれた細糸を紡ぎ出す。西洋では競って日本から舶来のシルクを購入している。これらはすべて細くてしなやかな女性の白い指から作られたものだが、『山海経』海外北経にみえる、女性が跪いて木に凭れ、糸を吐いているのを誇らしく伝えるかのようである。

D　糸も亦た別に物産志の中に詳らかにす。製糸　或いは機器を用う。又た一法有り。手を以て輪を挽く。力は水火に如かざるも、指爪に便なり。四五の繭毎に、能く一糸を成す。西人　其の細きを喜んで、多く之を購う。製糸は皆な女工を以てす。山海経に云う、欧糸の野は大踵の東に在り、女子有りて跪き樹に拠りて糸を欧く。

E　①糸亦別詳物産志中　補注G参照。　②山海経云　『山海経』巻八「海外北経」に「欧糸の野は大踵の東に在り、一女子の跪き樹に拠りて糸を欧く」とあり、郭璞の注に「桑を噉みて糸を吐くを言う。蓋し蚕の類なり」とある。

F　製糸のことも「物産志」に詳しい。製糸には機械を使用したりするが、その他にひとつの方法がある。手で車を回すのである。その回す力は、水力・火力には及ばないが、指先を使うのに便利である。四つか五つの繭で一本の糸にすることができる。西洋人は、その糸が細かいのを好んで、たくさん購入している。製糸者はすべて女工である。『山海経』では「欧糸の野は大踵の東にあって、ひとりの女性が跪いて樹にもたれて糸を吐いている」と述べている。

G　『日本国志』巻三十八「物産志」一の「糸」の条に以下のように見える。

日本之糸由来遠矣、応神帝時既遣使於呉、求織縫女。（『山海経』云、欧糸之野在大踵東、有女子跪拠樹、欧糸則上古既有之与。）至雄略帝命秦公酒統領養蚕、蚕大蕃息、賜姓為禹豆麻佐（自注略）。既知養蚕之利、国中亦能自織綢絹。近年与泰西通商、英、法諸国争購其糸、遂為国産第一大宗。其浴種、飼養、分薄、入簇諸法亦同於中国（自注略）。択繭繅絲、則以鉄鍋煮熱湯、将繭蒸軟、毎人司一鍋、一車、左手取繭四五枚、右手転車。（中略）凡繅糸多用女工、毎一人能抽糸三斤半、以紙条粘縛成総、毎総重八九銭。以四十総為一束、毎束三斤或二斤半。以二十八束為一包、毎包約重五十五六斤。近年多以機器製造、機器有水、火二法、水用木器、火用鉄器。鉄器為上、木器次之（自注略）。又有参酌水、火機器、別製手車以省人力者。

A　「其百八十九」

著手成春任意栽　手を著けて春と成し　意に任せて栽す
未花移種到花開　未だ花さかざるに　移し種えて花の開くに到る
移家家具無多少　家を移すや　家具　多少も無きも
却帯寒梅百樹來　却て寒梅百樹を帯びて来る

［韻字］栽・開・來（上平十灰）

B　①**著手**　手をつける。『晉書』杜預伝に「今　兵威　已に振うに、譬うれば破竹の如し。数節の後は、皆な刃を迎えて解け、復た著手する処無きなり」とある。　②**移種**　移植すること。白居易「有木詩八首」其五に「主人　名を知らず、移し種えて軒闥に近くす」（『白氏文集』巻二）とある。

C　気の赴くままに植樹するとすっかり春となった感じ。まだ花が咲かないうちに移植して開花を迎える。引っ越す時に家具などはさほど持っていかないが、寒梅など様々な木を携えてくる。

D　樹を種うるを善くす。合抱の木も、動輒すれば遷植す。多くは花の時に移し来りて、花の後に徙し去る者有り。土人　移居するや、遂に其の花木竹石を並せて、一一布置すること旧の如し。

E　①**合抱之木**　合抱はひとかかえの大きさ。『老子』第六十四章に「合抱の木は毫末より生じ、九層の台は累土より起こり、千里の行は足下より始まる」とある。②**遷植**　移植すること。沈約「郊居賦」に「其の竹は則ち東南に独秀し、九府に奇を擅にす。淇水に遷植せず、豈に根を楽池に分たんや」（『梁書』沈約伝）とある。③**布置**　物事をそれぞれの位置に並べ置くこと。『三国志』呉書「陸遜伝」に「遜　上疏して曰く、……其の布置を察するに、必ず他変無からん」とある。

F　木を植えることを得意としている。ひと抱えもある木でも、植え替えることがある。多くは花の咲く時に移植して、花の散る時にまた移す。日本人は転居するとき、花木竹石も一緒に持って行き、元のままにいちいち配置するのである。

G　『日本国志』巻四十「工芸志」の「農事」の条に以下のように見える。

凡農家種植、耕耨、培溉、收穫之法、多同於中国。惟種樹者善於移樹、雖合抱之木、尋丈之樹、移之輒無恙。法

於未移之前、就旧樹周囲、開溝深約尺許、凡根外向者、皆盤曲其勢、使抱本根、日以水澆溝中、使土受滋潤、根易脱離。所移之処、亦預掘一穴、既並根移植、多覆以土、別用木為架、交叉枝格、束縛牢緊、使受風不搖、則無礙生理。

A 「其百九十」

石墨沈沈陰火紅　石墨(せきぼく)沈沈として　陰火　紅なり
赤丹成渧出金銅　赤丹　渧(こう)と成り　金銅を出だす
百年千歳莫枯竭　百年千歳　枯竭する莫(な)かれ
下告黄泉上碧穹　下は黄泉に告げ　上は碧穹(へききゅう)

［韻字］紅・銅・穹（上平一東）

B ①**石墨**　石炭のこと。『水経注』巻十「溝水」条に「石墨は書す可し。又た之を燃すこと尽し難し。亦た之を石炭と謂う」とある。 ②**沈沈**　深い様。司馬相如「上林賦」（『文選』巻八）に「沈沈隱隱として、砰磅訇礚(ほうほうこうかい)たり」とあり、李善注に「沈沈は深き貌なり。隱隱は盛んなる貌なり」とある。 ③**陰火**　地中から産出したものによる火。 ④**赤丹成渧出金銅**　赤丹は赤い土。渧は水銀。『淮南子』巻四「墜形訓」に「壮土の気は赤天を御す。赤天、七百歳にして赤丹を生じ、赤丹、七百歳にして赤渧(せきこう)を生み、赤渧、七百歳にして赤金を生じ、赤金、千歳にして赤龍を生じ、赤龍　蔵に入りて、赤泉を生ず」とある。 ⑤**枯竭**　乾いて水分がなくなること。また、比喩的に、もともとあったものがなくなること。『論衡』巻十三「効力篇」に「江河の水は、馳涌(ちよう)滑漏(かつろう)、席地長遠、枯竭する無きの流れなるは、本源盛んなればなり」とある。 ⑥**下告黄泉上碧穹**　黄泉とは地下にあり、死者の行くとされる所。『春秋左氏伝』隠公元年に「（鄭伯）遂に姜氏を城潁(じょうえい)に寘(お)きて、之に誓いて曰く、黄泉に及ばずんば、相い見

ゆる無からん、と」とあり、注に「地中の泉なり。故に黄泉と曰う」とある。碧穹は青空の意。北宋の胡宿「太尉侍中鄭国宋公輓詞三首」其二に「箕に騎りて碧穹に向かい、琴竽三月に罷む」（『文恭集』巻二）とある。なお、白居易「長恨歌」に「上は碧落を窮め下は黄泉、両処茫茫として皆な見ず」（『白氏文集』巻十二）とある。

C　石炭は地中の深いところにあって、その燃えた火はあかあかとしている。赤い土は水銀となり、その土から金と銅を作り出している。百年後も千年後も枯渇することのないよう、地下の黄泉にも天上の蒼穹にもお祈りしている。

D　煤鉱は肥前の諸郡に大小三百二十九所、肥後の天章郡（ママ）に六所、甲斐の都留（つる）郡に二所、常陸の多賀郡に四所、美濃の可児（かに）郡に一所。銅山は河辺郡に四所、太和（ママ）の吉野郡に三所、摂津の河郡に一所、飛騨の吉城（よしき）郡に三所、下野の安蘇郡に一所、岩代の会津郡に一所、陸前の五造（ママ）郡に一所、越前の大野郡に十所、越後の蒲原（かんばらぐん）郡に八所。采る所の斤数は、別に「物産志」の中に詳びらかなり。日本の銅は呂宋（ルソン）、安南（あんなん）に如かず。煤は台湾、磁州に如かず。然るに古者（いにしえ）の金銀の山は大都枯竭（おおむね）して、地脈の鍾（あつ）まる所、此有るに頼るのみ。開掘の法、泰西の機器を用いて之を為し、甚だ便なり。

E　①**煤鉱**　炭鉱。　②**肥前**　旧国名の一つ。西海道に属し、現在の佐賀県と、壱岐・対馬を除く長崎県にあたる。　③**肥後**　**天章郡**　肥後は現在の熊本県。天章郡は天草郡の誤り。　④**甲斐**　現在の山梨県。　⑤**常陸**　現在の茨城県の南西部を除いた地域。　⑥**美濃**　岐阜県の南部を占める旧国名。　⑦**太和**　大和の誤り。現在の奈良県。　⑧**摂津**　現在の大阪府北中部の大半と

兵庫県南東部にあたる。⑨**飛騨**　現在の岐阜県。⑩**下野**　現在の栃木県。⑪**岩代**　現在の福島県西部にあたる。⑫**陸前**　**五造郡**　陸前は現在の宮城県の大部分と岩手県の一部。五造郡は玉造郡の誤り。⑬**越前**　現在の福井県北部。⑭**越後**　現在の新潟県。⑮**呂宋**　現在のフィリッピン。⑯**安南**　現在のベトナム。⑰**磁州**　現在の中国河北省邯鄲市磁県。

F　炭鉱は、肥前の諸郡に大小三百二十九ヵ所、肥後の天草郡に六ヵ所、甲斐の都留郡に二ヵ所、常陸の多賀郡に四ヵ所、美濃の可児（かに）郡に一ヵ所ある。銅山は、（薩摩の）河辺郡に四ヵ所、大和の吉野郡に三ヵ所、攝津の河郡に一ヵ所、飛騨の吉城（よしき）郡に三ヵ所、下野の安蘇郡に一ヵ所、岩代の会津郡に一ヵ所、陸前の玉造（たまつくり）郡に一ヵ所、越前の大野郡に十ヵ所、越後の蒲原郡に八ヵ所ある。採掘量は、別に「物産志」に詳しい。日本の銅は呂宋（ルソン）や安南には及ばない。石炭は台湾や磁州には及ばない。しかし昔からあった金山・銀山はほとんど枯渇しており、鉱脈が集中している所は、これらだけが頼りになっている。採掘の法は、西洋の機械を用いると、たいへん便利である。

G　『日本国志』巻三十八「物産志」一の「石炭」の条に「石炭自長崎、高島諸坑用西法開掘、亦為国産一大宗」と見え、その後に「石炭輸出表」を附し、明治元年から明治十一年までの石炭の「量」、「価」、「平均百斤価」、「百分量」、「比例価」などの詳細を明記している。

（以上、劉雨珍）

A 「其百九十一」

回青純白潔無塵　回青純白　潔として塵無し
色比官哥稍薄匀　色は官哥に比して　稍　薄匀なり
説是五郎親手製　説く是れ五郎　親ら手もて製ると
就中最愛愛蓮人　就中　最も愛す　蓮を愛する人を

［韻字］塵・匀・人（上平十一真）

B ①**回青**　染め付けの技法である青花に用いるコバルトの顔料。②**官哥**　官窯と哥窯。官窯は宮廷御用達の陶器窯のこと。宋代の汝窯、明代の景徳鎮などが有名。哥窯は現在の浙江省にあったとされる窯。いずれも青磁を制作したことで知られる。③**薄匀**　薄くて厚さが均一であること。北宋の胡宿「嘲蝶」詩に、「三春流寓し花房に寄せ、雌去り雄飛びて短牆を過ぐ。双翅薄匀なり何晏の粉、一身偸に帯ぶ賈充の香」（『文恭集』巻三）とある。④**五郎**　伊勢五郎。自注Dおよび注E⑤参照。⑤**愛蓮人**　北宋の儒者周敦頤（一〇一七～一〇七三）、字は茂叔。「愛蓮説」で知られる。

C　純白の地に青い釉薬で染め付けられた模様は、塵一つない清らかさ。そのさまは官窯や哥窯に比べるとやや薄くて厚さも均一である。これは伊勢五郎なる者が手ずから造ったものだというが、とりわけ愛蓮の人である周敦頤を画いたものがすばらしい。

D　史に言えらく、雄略十七年、始めて土師連に命じて清器を造らしむ。清器は、陶器なり。然れども崇神の時既に瓦博士有り、或いは言う、寺工と偕に来るに韓自りすと云う。陶の佳品は尾張の瀬戸・肥前の今利と称す。金

を盤らし花を描くは、加賀の九谷と称す。頗る外国に輸入す。足利氏の時、伊勢五郎なる者有り、曾て景徳鎮に至りて専ら青花を学び、年七十にして帰り、手に造りし者を携え、款して五郎大夫と曰う、製りし所の七種の香盒は、蓮を愛する周茂叔の像を画くを以て最も佳と為す。紙のごとく薄く磬のごとき声あり、幾ど定、汝に類し、最も時宝と為す。

E　①**史言**　『日本書紀』雄略天皇の条に「十七年の春三月の丁丑の朔にして戊寅に、土師連等に詔して、朝夕の御膳盛るべき清器つくる者を進らしめたまう。是に土師連が祖吾笥、仍りて摂津国の来狭々村、山背国の内村・俯見村、伊勢国の藤形村と丹波・但馬・因幡の私の民部を進る。名づけて贄土師部と曰う」とある。　②**崇神時**　崇峻天王の誤り。『日本国志』には「是より先、新漢陶部高貴　来りて能く旋盤等の具を作る有り、帝命じて陶工に教えしむ。崇峻の時に及んで、百済　麻奈父奴、陽貴文、陵貴文、昔麻帝弥の四人を遣り来らしめて、瓦博士と称し、世よ亦た其の法に習う」とあり崇峻とする。補注G参照。『日本書紀』崇峻天皇の条に、「元年の春三月、……是の歳に、百済国、使い并せて僧恵總・令斤・恵寔等を遣して、仏舎利を献る。百済国、恩率首信・徳率蓋文・那率福富味身等を遣して、進調り、并せて仏舎利、僧聆照律師・令威・恵衆・恵宿・道厳・令開等、寺工太良未太・文賈古子・鑪盤博士将徳白昧淳、瓦博士麻奈文奴・陽貴文・陵貴文・昔麻帝彌、画工白加を献る」とある。　③**盤金**　金線を用いて図案などを施すこと。　④**輸入**　『日本国志』では「輸出」とする。補注G参照。　⑤**伊勢五郎**　室町時代に、明の景徳鎮で陶磁器制作を学んだという伊勢（三重県）出身の伊藤五郎太夫。その作には「五良大甫　呉祥瑞造」の銘があるのに由来するとされるが、現在では作者は明の呉祥瑞で、伊勢五郎は貿易商であったと考えられている。　⑥**青花**　中国における染め付けの技法で、白地に青の模様を施したもの。　⑦**七種香盒**　祥瑞の蜜柑・瑠璃雀・瓜・瓢箪、古染付の技法による牛・屏風箱、呉須による周敦頤の七種類の香合を一般的に型物七種香合と称する。「祥瑞」は「五良大甫呉祥瑞造」の

銘をもつことに由来し、明代に景徳鎮で作られた染付磁器。白地に青いコバルトの顔料を施す点では古染付、呉須と同じだが、古染付は日本の技法。呉須は明末の民窯で製作されたものを指す。⑧**磬声**　『毛詩』商頌「那」に「既に和し且つ平、我が磬声に依る」とあり、毛伝に「依は倚なり。磬は声の清き者なり。」　⑨**定、汝**　定窯と汝窯。定窯は河北省曲陽県にある北宋の官窯で、白磁を制作したことで知られる名窯。汝窯は河南省臨汝県にある北宋の官窯で、青磁を制作したことで知られる名窯。

F　史書によれば、雄略十七（四七三）年、はじめて土師連（はじのむらじ）に命じて清器を造らせた。清器は陶器のことである。しかしながら崇神天皇（崇峻天皇の誤り）の時には瓦博士がいて、一説には、寺工とともに韓の国から来たという。陶器で優れた作品とされるのは、尾張の瀬戸焼、肥前の伊万里焼と言われる。金をめぐらし華やかな模様を施すのは、加賀の九谷焼とされ、かなり外国にも輸出されている。足利氏の時、伊勢五郎という者がいて、かつて景徳鎮に赴いて青花の手法を学んで、七十歳で造った陶器を携えて帰国した。作品には「五郎大夫所制」と記されている。七種の香盒は、蓮を愛した周茂叔（周敦頤）の像を画いたものが最も優れている。紙のように薄く、磬のような音色がして、ほとんど定窯、汝窯に同じで、とりわけ優れた宝とされた。

G　『日本国志』巻四十「工芸志」の「陶器」の条に以下のように見える。

雄略十七年、始命土師連造清器、清器即陶器也。先是、有新漢陶部高貴来能作旋盤等具、帝命教陶工。及崇峻時、百済遣麻奈父奴、陽貴文、陵貴文、昔麻帝弥四人来、称瓦博士、世亦習其法。陶之佳品、称尾張瀬戸、肥前今利、盤金描花者推加賀九谷。摶泥甫就、先用銅糸嵌作山水樹石、花草翎毛之形、俟著色時施藍作地、別以青緑諸色図肖物形、毫髪悉備、所着色皆用薬料、光艶照人、神采如生。別有一種名七宝焼、亦用銅糸作匡廓、雑采雲母、琉璃、

螺紋、貝錦諸物以作、采色斑闌陸離、其光煜煜、而雕嵌入微、拭之無痕。此又本銅器商金、漆器螺鈿之法而用之於磁器者也。亦能作青花、足利氏時有伊勢五郎者曾至景徳鎮専学青花、年七十帰、携其手造者欵曰五郎大夫、所製七種香盒、以画愛蓮周茂叔像為最佳。紙薄磬声、幾類定、汝、賞鑑家極宝之。日本陶器、論其純白雅素実不如中国、而近日兼習仏蘭西法、於所造器巧搆式様、屢変不窮、所絵花鳥又時出新意、不習藍本、著色亦花艶奪目、故西人喜購之、為輸出一大宗。

A 「其百九十二」

不須攢剔亦玲瓏　攢剔(さんてき)を須(もち)いざるも亦た玲瓏たり
漆枕仇家手自工　漆枕　仇家(きゆう)　手自ら工なり
翻出六朝金碧畫　翻出す　六朝の金碧の画
縹霞先著退光紅　縹霞(ひょうか)　先ず著(つ)く退光の紅

［韻字］瓏・工・紅（上平一東）

B ①**攢剔** 攢犀と剔紅の技法。自注Eの⑧⑨を参照。 ②**仇家** 仇英。明代の画家。字は実父、号は十洲、江蘇省太倉の人。山水画や人物画に優れることで知られる。 ③**金碧畫** 金箔などで装飾した絵画。日本で室町時代以降に制作されるようになった金碧画は、金箔の地に岩絵具で彩色を施すもの。元の湯屋(とうこう)撰『画鑑』「唐画」の条に「李思訓は画きて色を山水に著くるに、金碧を用いて暉映し、自ら一家の法を為す」とある。李思訓は唐代の画家。のちに金碧山水の創始者とされる。 ④**縹霞** 「漂霞」と同義か。漆器に施す一種の蒔絵の技法。金粉や金箔を施した上に漆を塗り、それを研いて下の金箔などを浮き上がらせる技法。自注E注④洒金を参照。 ⑤**退光** 光沢のないもの。明の文震亨撰『長物志』巻六「榻」に「近ごろ大理石の鑲(ちりば)むる者有り、退

光の朱黒の漆するもの有り、中に竹樹を刻み、粉を以て填する者、新たに螺鈿する者有り、大いに雅器に非ず」とある。

C　攢犀や剔紅の技法を用いずとも、また素晴らしい。漆塗りの枕に描かれた仇英の画は、巧みな筆遣い。六朝時代の金碧画からヒントを得た縹霞（蒔絵）の技法は、まず光沢のない朱の漆を塗る。

D　髹漆の器は、最も能品と称す。泥金、描金、洒金もて雲烟、山水、花木、鳥獣を作す、巧みなる画手と雖も亦た復た如かず。又た縹霞彩漆有り、爛爛として人を射て、意采飛動す。螺鈿の器は、雕嵌微に入り、手もて之を拭くに、痕無きが若き者なり。七脩類稿に謂えらく諸製皆な創るに日本自りす。天順の間、楊倭漆最も工に之に效う。然れども究に及ばずと。我が宋、元の攢犀（朱黄黒の三色の漆を用い、諸象を雕刻するに、其の間処を鑽して、層ねて見われ畳ねて出でしむ。又た西皮と名づけ、亦た犀皮と名づく。即ち楚詞の犀毗にして、宋、元の人の作る所は至だ佳なり）、張、楊の剔紅（厚き朱漆を用いて之を鏤するは、名づけて剔紅と曰う。元朝の西塘に張成、楊茂有り、最も名を得たり）、呉、越の戧金の若し。東人　之を得れば、則ち錦嚢繍帙、什襲すること啻ならず、之に效うも亦た我に如かざるなり。

E　①**髹漆**　漆塗りの技法。髹は漆を塗ること。『史記』貨殖列伝に「木器の髹する者千枚」、正義に「顔云う、物に漆するを以て之を髹と謂う」とある。　②**泥金**　金箔と膠を混ぜた金色の顔料で模様を描く技法。　③**描金**　漆を塗った上に金粉や銀粉で模様を描く技法。　④**洒金**　蒔絵の技法。漆を塗ったのちに金粉や金箔を撒き、さらに漆を塗って磨き、金の模様を浮かび上がらせる技法。　⑤**彩漆**　漆に顔料を加えて発色させる技法。　⑥**雕嵌**　彫ったり嵌め込んだりすること。　⑦**七脩類稿**　明の郎瑛

（一四八七～？）著『七修類稿』巻四十五「倭国物」の条に、「古に戧金有るも泥金無く、貼金有るも描金、洒金無く、鉄銃有るも木銃無く、硬屏風有るも軟屏風無く、剔紅有るも縹霞、彩漆無く、皆な起こるに本朝自りす。東夷の或いは貢し或いは伝うるに因りて有るなり。描金、洒金は、浙の寧波に倭国の通史多し、因りて与に情熟し言餂して之を得、洒金は尚お彼の円きに如く能わず、故に假の倭扇も亦た寧波の人造れり。泥金、彩漆、縹霞は、宣徳の間に人をして彼に至らしめ、其の法を伝う」とある。また同書巻四十七「楊塤」の条には、「天順の間、楊塤なる者有り、漆の理を精明にし、各色倶に合すべくして、倭漆に於いて尤も妙なり、其の山水人物を漂霞すること、神気飛動し、真に之を描写するも如かず、愈いよ久しく愈いよ鮮なり、世に楊倭漆と号す。製る所の器皿も亦た珍貴にして、近時絶だ少し、人惟だ其の絶芸なるを知るも、士人の如かざる者有るを知らず」と見える。なおこの詩の自注と『日本国志』の引用は、『格致鏡原』巻三十六所引の七修類稿の記述に基づく。 **⑧宋、元之攢犀** 漆器に彫刻を施す技法。またその漆器。「西皮」は宋の曾三異『因話録』（元、陶宗儀撰『輟耕録』巻十一所収）に「謂えらく犀器の西皮と称する者は、世人誤りて以て犀角の犀と為すは非なり。乃ち西方の馬鞧の黒自りして丹、丹自りして黄、時に復た改易して、五色相い畳なり、馬鐙磨擦して、凹処の粲然として文を成す有り、遂に犀器を以て倣いて之を為す」とある。「犀皮」は「犀毗」に同じ。宋の兪琰『席上腐談』巻上に「漆器に所謂犀皮なる者有り、西毘国より出で、訛して犀皮と為る」とある。なお『楚辞』招魂には「晋は犀比を制るに、費くこと白日のごとし」とあり、王逸の注に「言うこころは、晋国の工は簿、棊、箸を作り、犀角を比集して、以て雕飾と為す」とあることから、これは犀の角で作った装飾品であり、漆器とは異なるものと思われる。 **⑨張、楊之剔紅** 剔紅は、堆朱のこと。朱の漆を重ねて塗り、彫刻を施すもの。足利義詮に仕えた長充なる人物が堆朱をよくし、元朝の名工とされる張成と楊茂の名から一字ずつをとって堆朱楊成を名乗り、代々堆朱の技を伝えている。 **⑩呉、越之戧金** 戧金は象嵌のこと。明の楊慎撰『丹鉛続録』巻十「鈿金」に「唐六典に十四種金有り、曰く銷金、曰く拍金、曰く鍍金、曰く織金、曰く研金、曰く披金、曰く泥金、曰く鏤金、曰く撚金、曰く戧金、曰く圏金、曰く貼金、曰く嵌金、曰く裹金。」 **⑪錦嚢繍**

帙　錦や刺繍をした美しい袋や帙。『新唐書』李賀伝に「毎旦　日出づれば、弱馬に騎り、小奚奴を従え、古錦嚢を背い、得る所に遇えば、書して嚢中に投ず。」　⑫什襲　幾重にも重ねて包み、大切に蔵すること。

F　鞣漆の器は、最もすぐれた品と称される。泥金、描金、洒金をもって雲煙、山水、花木、鳥獣を画いており、巧みな画家であっても及ばないほどである。また縹霞や彩漆の技法があり、きらきらと人を射るように輝き、その趣や彩りは生き生きとしている。螺鈿の器は、雕嵌の技法が微に入り細を穿ち、手でこれをこすっても、嵌め込んだ痕跡がないかのようである。『七修類稿』にはこれらの手法はみな日本から出たものであるとしている。天順年間（一四五七～一四六四）に、楊倭漆が最も巧みにこれを模倣したが、ついに及ばなかった。それはちょうど我が宋、元の攢犀（朱・黄・黒の三色の漆を用いて、さまざまな形を雕刻し、間に穴をあけるように彫り、何層にも漆の色が現れ出るようにする。また西皮と呼び、犀皮とも呼ぶが、つまりこれが楚辞にいうところの犀毗であり、宋、元の人が製作したものがとりわけ素晴らしい）、張、楊の剔紅（厚い朱の漆を用いてこれを彫ったもので、剔紅と名付けられた。元朝の西塘に張成、楊茂という者がいたがとりわけ名手として知られた）、呉、越の戯金のようなものである。東の人がこれを手に入れれば、錦や刺繍の美しい袋や帙で大切に収蔵することこの上ないが、これを模倣してもやはり我が国のものには及ばないのである。

G　『日本国志』巻四十「工芸志」の「漆器」の条に以下のようにある。

作小器物、盤有円、方、八角、縑環四角、牡丹弁等式。匣有長方、渾円、六角等式。有一盤中分作大小数具者、又有裏為小盒、表為大盒、層累容積至七八合乃至十数合者。皆以木為質、以漆為飾、漆皆退光、黒可鑑人。其砕金

作泥如繁星点者、為泥金。以金描山水台榭、魚鳥花果者、為描金。用金泥以筆揮洒、作雪片、作冰紋者、為洒金。（村瀬之熙謂漆内雑金為洒金、今考漆内雑金乃泥金別法、如古銅鑪兼金、漆二色、非洒金也。）黒漆為地、以金銀彩漆描作図画、再縟以黒漆磨揩再四、以出其文者為漂霞彩漆。（日本謂之磨出摸金。村瀬之熙謂即漂霞彩漆。考此数法皆出於日本、『七脩類稿』曰、古有戧金而無泥金、有貼金而無描金、洒金、有剔紅而無漂霞彩漆。皆起自本朝。因東夷或貢、或伝而有也。描金、洒金、浙之寧波多倭国通使、因情熟言餂而得之。洒金尚不能如彼之円、故假倭扇亦寧波人造也。泥金、彩漆漂霞、宣徳間、遣人至彼伝其法。又曰、天順間、有楊塤者明漆理、各色俱可合、而於倭漆尤妙其漂霞、山水人物神気飛動、真描写之不如、愈久愈鮮、世号楊倭漆。）其以螺鑲嵌者名螺填、欲紅光者以胭脂、欲翠光者以黛緑、皆染裏面、其純白厚賦者尤佳。各擘片如紙、浸醸醋中一夕、螺乃受刀、肖作花草諸形、紛切細片、再以針劃器作凹処如仰瓦形、細嵌入微、以手摩拭不著痕迹者為貴。（『泊宅編』曰、螺填器本出倭国、物象百態、頗極工巧、非若今市人所售者。考『游宦紀聞』曰、宣和六年、李資徳富轍上螺鈿硯匣。『格古要論』曰、螺鈿器皿出江西吉安府廬陵県、宋朝内府中物及旧做者倶是堅漆、或有嵌銅絲者甚佳。『通雅』曰、宋内府有鈿螺、即螺鈿也。『遵生八牋』、宣徳有填漆器皿、有漂霞、砂金、蜊嵌、堆漆等製、以新安方信川所製為佳。蓋中国旧有此法。惟呂種玉『言鯖』作羅殿、曰、牂牁蛮国、其王号鬼王、其別帥曰羅殿。王在辰、交之間、即今雲貴界外、世用其蛤飾器、謂之羅殿。今江西徽州工人以製杯盤屏匣、精工細巧、実出於此、俗謂之螺甸、乃羅殿之誤也。其説較詭異、然亦不言来自日本。日本村瀬之熙曰、此方所製螺填殊不及漢製者、蓋其所用螺蛤品類不一、而佳者絶不産此方。漢産螺四面皆有光、国産者止一面有光、故雖有巧工必取漢産螺蛤製之。観此知螺填之法乃本於中国、与泥金、描金、洒金出自日本者有殊。『泊宅編』所云蓋誤伝也。）亦能作剔紅、俗名堆朱、其品目頗夥、曰剔紅、（紅漆為地、以硃漆堆起三十余層、刻人物楼台、花卉翎毛及連環。）曰堆紅、（硃漆、黒漆層層堆起、刻痕有紅、黒糸繚繞。）曰堆烏、（黒漆中層層有細紅糸、多刻作連環。）曰堆漆、（全用黒漆、刻作連環及花卉。）曰桂漿、（黄漆為地、以黒漆堆起、黒漆中有三層細紅糸。）曰紅茄緑葉、（用彩漆刻花卉翎毛。）曰金糸、（黄、黒、硃漆重畳堆起。）

曰剔金、（黄漆、黒漆重畳堆起。）曰犀皮、或名松皮。（碟、黄、黒漆重畳堆起、罩以黒漆、刻連環、差浅且漫。）江戸有楊成者、世以善雕漆隷於官、据称其家法得自元之張成、楊茂云。（『遵生八牋』曰、宋人雕紅漆器多以金銀為胎、有錫胎者、有蜬地者、有用五色漆胎、刻法深浅随粧露色。元時有張成、楊茂二家、技擅一時。『格古要論』曰、剔紅器皿無新旧、但看硃厚色鮮、紅潤堅重者為好。宋朝内府中物多是金銀作素者。元朝嘉興府西塘楊匯有張成、楊茂、剔紅最得名、但硃薄而不堅者多。日本国、琉球国独愛此物。楊成之法、蓋本此二家也。）

A　「其百九十三」

開關轉得丸泥力　　関を開いて転じて得たり丸泥の力
修月還將七寶裝　　月を修むるがごとく還た七宝を将って装う
何意鶺金螺鈿外　　何ぞ意わん　鶺金螺鈿の外に
更能煉石補天荒　　更に能く石を煉し天荒を補うことあらんとは

［韻字］装・荒（下平七陽）

B　①第一句　『後漢書』隗囂伝に、「元は請うるに一丸の泥を以て大王の為に東のかた函谷関を封ぜん、此れ万世の一時なり」とある。実藤氏の指摘するとおり、ここでは、泥によって函谷関を封鎖して敵の侵入を防いだ例を転じて、関所を開いて泥の力（陶器の製法）を中国から得ることになったことをいう。　②第二句　『酉陽雑俎』巻一天咫に「太和中、鄭仁本の表弟、姓名を記さず、嘗て一王秀才と嵩山に遊び、蘿を捫り澗を越ゆるに、境は幽夐を極め、遂に帰路に迷う。将に暮れんとするに之く所を知らず、徙倚するの間、忽として叢中に鼾睡の声あるを覚ゆ、榛を披いて之を窺うに、一人の布衣の甚だ潔白にして、一樸物を枕にして方に眠熟す、即ち之を呼びて曰く、某　偶たま此の径に入りて路に迷う、君は官道に向かうを知るや否やと。其の人

首を挙げて、略視するも応ぜず、復た寝ぬ。又た再三之を呼び、乃ち起坐して顧みて曰く、此に来たれ二人と。因りて之に就き、且つ其の自る所を問うに、其の人笑いて曰く、君は月の乃ち七宝もて合成するを知るや。月の勢は丸の如く、其の影は日に燦かされ、其の凸なる処や、常に八万二千戸の之を修むる有り。予は即ち一数なりと」とあるのにもとづく。月は七つの宝によって合成され、多くの人によって補修されているとする考え。月光の美しさをいうもの。また宋の文同「寄題杭州通判胡学士官居詩」其四に、「予は恐る世人の嵩丘嵓洞の中、中に八万二千の月を修むるの戸有るを知らざるを」（『丹淵集』巻十）とある。③**鵳金**　金で装飾を施すこと。黄遵憲「桜花歌」に「鵳金の宝鞍　金の盤陀、螺鈿の漆盒　叵羅を携う」とある。④**第四句**　女媧が五色の石を煉して天を補う故事。『淮南子』覧冥訓に「往古の時、四極廃れ、九州裂け、天は兼ねて覆わず、地は周く載せず。火は燬炎として滅せず、水は浩洋として息まず。猛獣　顓民を食らい、鷙鳥　老弱を攫る。是に於いて女媧は五色の石を鍊して以て蒼天を補い、鼇足を断ちて以て四極を立つ」とあるのによる。

C　（敵の侵入をふせぐべき）関所を開くことによって、逆に陶器の製法を（中国から）習得した。七宝で合成されているという月のごとく、（日本には）七宝によって装飾する焼き物もある。まさか金の装飾や螺鈿以外に、女媧が五色の石で蒼天を補ったように、七宝で飾る技法があったとは思いもしなかった。

D　陶器の盤金描花自り以外に、七宝焼と名づくる者有り、亦た銅糸を用いて匡廓を作り、雑えて雲母、琉璃、螺紋、貝錦の諸物を采りて以て采色を作し、班闌陸離、其の光は煜煜たり。此れ又た本は漆器螺鈿、銅器商金の法にして之を磁器に用うる者なり。日本の銅器は多く鵳金陥銀法を用う。詩に、僸革に鵳たる有り。鄭箋に云う、鵳は金飾の貌なりと。稗史類編に云えらく、嘗て夏の干戈に雕するを見るに、銅上に相嵌するに金を以てすと。古は

刻を謂いて商と為す、又た商金と名づく。宋史百官に鞍勒に陥銀有り、元史に簡銀と作すは、即ち此の法なり。

E　①**七宝焼**　銅や銀などの金属面に細い金属線で模様を象り、ガラスの釉薬などを施して、図柄を焼き付けたもの。　②**螺紋貝錦**　貝殻の紋様や色彩を再現するような技法をいうか。「七宝」はもとは仏教の七種の宝に由来し、金、銀、瑪瑙、珊瑚、瑠璃、玻璃、硨磲（しゃこ貝）に匹敵するような美しさをもつ工芸をいうことから、このような表現を採ったか。　③**班闌陸離**　「班闌」は斑斕、班蘭に同じ。「斑斕」はあでやかで美しいさま。唐の権徳輿「送別沅泛」詩に「斑斕たる五綵の服、前路に春物熙く」とある。「陸離」は色彩が入り混じるさま。『淮南子』本経訓に「五采　勝れるを争い、流漫して陸離」とあり、高誘の注に「流漫は采色相参和するなり。陸離は美好の貌。」　④**煜煜**　明るく輝くさま。梁の簡文帝「詠朝日」詩に「団団として天外に出で、煜煜たり上層の峰。」　⑤**商金**　「商」は金や銀で装飾を施すこと。「鬳」に同じ。袁枚『隨園隨筆』商金銀之訛に「今の骨董家の銅器に金銀を鑲むる者有り、号して商金商銀と称す。商の言を為すや鬳なり、鄭箋に謂う所の鬳は金飾の貌なりとは、是なり。乃ち嵌鑲の義なり」とある。　⑥**陥銀**　金銀をはめこんで飾る技法のこと。宋の江少虞『事実類苑』巻二十五「賜鞍轡」に「参政副枢宣徽節度使、駙馬には、繡盤鳳襖花鞦七十両、陥銀の銜鐙あり」とある。また「鋂銀」のことか。明の楊慎『丹鉛余録・總録』巻八鋂瓖に「鋂は音は減、鏤金を以て馬首に飾るなり。又た鉄質金文を曰い、鋂と曰うなり。西京の賦に、金鋂鏤錫といい、馬融の広成の頌に、金鋂玉瓖といい、詩に鈎膺鏤錫と云い、国語に懐纓挟瓖と曰うは、皆な此を指す。今　馬鞍を名づけて鋂銀と曰う」とある。また明の方以智『通雅』巻三十三器用・古器に「張衡の賦に、金鋂（音は減）銀鏤というは、鉄質金文を謂い、馬轡を飾るなり。馬融の広成の頌に、金鋂銀鑲という。今の俗の鞍轡什物を以てするは鋂銀と曰う。事件の細なる者は絲鋂と曰い、片なる者は片鋂と曰う」とある。これはあるいは鍍金のことかもしれないが、注⑪所引の『通雅』は今の「鋂銀」に同じとする。　⑦**詩**　『毛詩』周頌・載見に「鞗革　鬳たる有り、休いにして烈光有り」とあり、鄭箋に「鬳は金飾の貌」とある。　⑧

稗史類編　明の王圻『稗史彙編』の誤りか。黄遵憲が目睹したとおぼしき『格致鏡原』巻三十六珍宝類には、「稗史類編に……予嘗て夏の雕戈の銅上に相嵌するに金を以てし、其の細たること髪の如きを見る」とある。　**⑨古謂刻為商**　『通雅』巻三十三器用・古器に「金銀の糸を以て器を戧（かざ）るは商と曰う、鑲嵌を謂うなり。元美曰く、趙希鵠云えらく、夏の時　器は多く相嵌す、訛して商嵌と為す、……蓋し古は刻を謂いて商と為す、商金商銀は、乃ち古の遺称なり」とある。　**⑩宋史百官**　『宋史』巻百五十輿服志二に「陥銀銜鐙」とある。また『格致鏡原』巻二十九舟車類・馬具に「鐙　宋志百官に鞍勒に陥銀、銜鐙有り」とあるのに拠るか。　**⑪元史作簡銀**　『通雅』巻三十三に「宋志百官に、鞍勒に金塗、銀装、牡丹、枝具、雉子、白韉、陥銀あり、嚙鐙の所謂陥銀は、即ち今の鋄（ばん）銀なり。元志は簡銀に作り、弱侯は鍤銀に作る」とある。なお、『元史』には見えない。

F　陶器に金線をめぐらし華やかな模様を施す以外に、七宝焼というものがある。これも銅線を用いて枠組みを作り、雲母（うんも）や琉璃（ガラス）、螺紋、貝錦などをとり混ぜて用いて彩色を施すもので、美しく色とりどりで、光り輝いている。これもまたもともとは漆器に施す螺鈿や、銅器に施す商金の技法であり、これを磁器に用いたものである。日本の銅器は多くは鶬（しよう）金・陥銀法を用いている。『詩経』に「鞗革（ちようかく）　鶬（しよう）たる有り」とあり、鄭玄の箋に「鶬は、金の装飾のさまである」と言っている。『稗史類編』には、「嘗て夏の干戈に雕するを見るに、銅上に相嵌するに金を以てす」と見える。昔は刻することを商と言ったので、商金と名づけるのである。『宋史』百官志に「鞍勒に陥銀有り」とあり、『元史』に「簡銀」と言っているのは、つまりこの技法である。

G　「其百九十一」補注G所引の『日本国志』巻四十「工芸志」を参照。

A 「其百九十四」

十三行竹袖中收　十三行の竹　袖中に收め
寶扇家家愛聚頭　扇を宝とし　家家　聚頭(しゅうとう)を愛す
藏得秋山平遠畫　蔵し得たり秋山平遠の画
鴉青紙認摺痕留　鴉青(あせい)紙に認む摺痕(しょうこん)の留まるを

［韻字］收・頭・留（下平十一尤）

B ①**十三行竹**　自注D参照。　②**聚頭**　折り畳める扇のこと。自注E注①参照。　③**平遠**　山水画の技法。近くの山から遠くの山を眺める構図。宋の郭思『林泉高致集』に「山に三遠有り。山下自(よ)りして山顛を仰ぐは、之を高遠と謂う、山前自りして山後を窺うは、之を深遠と謂う、近山自りして遠山を望むは、之を平遠と謂う」とある。また元の陶宗儀『輟耕録』巻八「写山水訣」には「山は三遠を論ず。下従(よ)り相い連りて断たざるは、之を平遠と謂う。近き従り隔開して相い対するは、之を濶遠と謂う、山外従りする遠景は、之を高遠と謂う」とある。　④**鴉青紙**　黒い紙。宋の郭若虚『図画見聞誌』巻六「高麗国」に「彼　人をして毎に中国に至らしむるに、或いは摺畳扇を用いて私覿(してき)の物と為す。其の扇は鴉青紙を用いて之を為す」とある。

C 十三本の竹でできた扇は袖の中に収まるほど。扇を珍重し、誰もが聚頭を愛好する。所蔵するのは、秋の山が遠く連なる絵の施された扇面で、鴉青紙には折りじわが残っているのが認められる。

D 摺畳(しょうじょう)扇は実に東人より始む、一に聚頭と名づく。竹を削りて十三行と為し、長さ三四寸、之を腰間に挿す。亦た長さ二尺なる者有り。泥金紙を用い、烏木の柄なり。張東海集に称す、永楽中に倭国以て貢に充て、成祖分ち

て群臣に賜い、又た其の製に倣いて以て賜予に供し、遂に遍く之を用うと。蓋し源義政は臣を我に称せしに、之を以て筐篚に充つる者なり。然れども宋時には既に流伝有り、東坡謂う、高麗の白松扇、之を展ぶるに広さ尺許、之を合するに止だ両指許と。又た江少虞の皇宋類苑に云う、熙甯の末、相国寺に游ぶに、日本の扇を売る者を見る、琴漆の柄あり、鴉青紙を以てし、餅の如く、揲みて旋風扇と為し、淡粉もて平遠なる山水を画き、筆勢は精妙なりと。即ち摺扇なり。日本人は書画を喜み、前明の名家、国初の諸老の扇面を蔵すること至だ多し。

E　①**摺畳扇**　折りたたむことのできる扇。『通雅』巻三十三扇には「摺扇は、東裔より起こりて、今日に盛んなり。……今の世の用うる所の摺畳扇は、亦た聚頭扇と名づく」とあり、また明の文震亨『長物志』巻七「扇扇墜」には「今の摺畳扇は、古は聚頭扇と称す、乃ち日本の進むる所なり」とある。　②**泥金紙**　金箔と膠による顔料を塗布した紙。　③**烏木**　黒檀。材質が堅く、色は黒い。　④**張東海集**　明の張弼『張東海文集』巻四に「中国は古は折扇無し、嘗て王秋磵記を見るに、元の初め東南夷の使者　聚頭扇を持するに、当時譏りて之を笑う。我が朝の永楽の初め、始めて特だ僕隷の下人の所持する有るも、以て人に事うるに便なるのみ。倭国の貢に充つるに及び、太宗徧く群臣に賜い、内府は又た其の制に仿い、以て賜予に供し、天下迨ど徧く之を用いて、団扇革まれり」とある。また『格致鏡原』巻五十八にも同様の記述が見える。　⑤**源義政**　足利義政（一四三六～一四九〇）。　⑥**東坡謂**　『格致鏡原』巻五十八燕賞器物類二・扇「摺畳扇」に「東坡謂えらく、高麗の白松扇は之を展ぶれば広さ尺余、之を合すれば両指許に止まる。正に今の摺扇は蓋し北宋自り已に之有り。倭人も亦た製りて泥金面、烏竹骨を為して、貢に充つ。出づること東夷自りするは果して然り」とあるのにもとづくか。蘇軾の集には見えない。　⑦**江少虞皇宋類苑**　宋の江少虞（生卒年不詳）の『宋朝事実類苑』を指す。巻六十に「熙寧の末、予　相国寺に遊ぶに、日本国の扇を売る者を見る、琴漆の柄、鴉青紙の厚きを以てし、餅の如く、揲みて旋風扇と為す。淡粉もて平遠なる山水を画き、……意思深遠にして、筆勢は精妙

なり、中国の善く画く者も、或いは能くせざるなり」とある。なお、自注のこの部分は底本の句読を改めた。⑧琴漆　琴に塗る漆。李商隠「驕児」詩に「躬を曲げて窓の網を牽き、峪唾（かくだ）して琴の漆を拭う」とある。ここでは漆を塗ったような材質の柄か。⑨淡粉　胡粉（ごふん）のことか。貝殻等で作られた日本画で用いられる白色の絵具。

F　摺畳扇（扇子）は、まことに日本人から始まったものである。別名聚頭という。竹を削って十三本にし、長さは三四寸、これを腰にさしはさむ。長さが二尺のものもある。泥金紙を用いて、柄は黒檀である。『張東海集』には、永楽年間に倭国が献上品としてこれを充て、成祖がこれを群臣に分けて下賜し、またその製法に倣って賞賜の品に供したので、かくて広くこれを用いるようになった。恐らく源義政が我が国に臣下と称した際に、扇を献上品に充てたものであろう。しかしながら、宋の時代にはすでに扇は伝わっており、蘇東坡が、高麗の白松扇は、これを広げると大きさは一尺ほどで、これを畳むと二本の指ほどの幅であると言っている。また江少虞の『皇宋類苑』には、熙寧年間の末、相国寺に遊びに行った折、日本の扇を売る者を見かけたが、それは琴漆の柄で、鴉青紙を施しており、餅（ピン）のようで、折りたたんで旋風扇となる。淡粉で平遠なる山水を描き、その筆勢は精妙なものであったとある。つまりこれは摺扇（扇子）のことである。日本人は書画を好み、前代の明の名家や、国朝初期の諸老の扇面を蔵することが非常に多い。

G　『日本国志』巻四十「工芸志」の「扇」の条に次のように見える。

所作扇有上平下円如古之便面者、有作方体如古之方麯者、有伸如手掌微作拱勢如今之掌扇者、通行則用団扇。皆削竹為柄、其一節細剖成糸、以縄牽制之使分張如翼、外糊以紙、間或絵山水人物。其価至賤、毎柄不過数銭。盛暑

時堆溢廛肆、有賻物者輒挙一二柄贈人、其旧習也。若可以摺畳者一名撒扇、又名聚頭扇、中古時将士臨陣、変古人羽扇之制用以指揮軍士、其柄繋以流蘇。世伝将軍源義家軍扇以竹為骨、凡十二行、長一尺二寸、表裏用朱銀分絵日月。後有用鉄骨者、足利氏称臣於明、毎以充貢、中国頗盛行。（摺畳扇本始於東人、宋時既有流伝、自明以来盛行於世。据劉元卿『賢奕編』、張東海『貫耳集』謂、永楽之初、惟僕御下人始用之。及成祖徧賜群臣、内府又倣其制以供賜予、遂盛行於世云。）高麗諸国亦習其製。今製長僅三四寸、竹皆十三行、或有数十行者。柄或用烏木、或用鯨骨、象牙。近日又喜聚羽為扇、鵲翅、鷺羽、雀翠、雕翎、長或二尺、貫以綵縄、繋以明珠、光采射人。西四婦女喜購之、又遍伝於泰西矣。

A　「其百九十五」

輕於蟬翼薄於紗　蟬翼よりも軽く紗よりも薄し
闌畫烏絲整又斜　闌は烏糸を画きて整又た斜
不用文人愁紙貴　文人　紙の貴きを愁うるを用いず
淡黄遍種瑞香花　淡黄　遍く種う　瑞香花

［韻字］紗・斜・花（下平六麻）

B　①闌画烏絲　「烏糸の闌」、つまり「烏糸欄」のこと。黒い罫線を引くこと。唐の李肇『唐国史補』巻下に「宋亳の間に織りて界道を絹素に成す有り、之を烏糸欄、朱糸欄と謂う」とあり、もとは白絹に罫線を織り込んだものであったようだが、宋の曾慥『類説』巻二十六「烏糸欄紙」には「宋亳の間に紙の織りて界道を成す者有り、之を烏糸欄紙と謂う」とあり、紙にも施すようになったものと思われる。明の潘之淙『書法離鉤』巻五には「烏糸闌なる者は蔡襄の専らとする所なり」とあり、特に北宋の書家蔡襄の名が挙がっている。南宋の陸游「遣興」詩には、「烏糸の闌上　詩初めて就り、緑綺の声中　酒半ば酣ゆ」と見え

る。　②**瑞香花**　瑞香は沈丁花のことだが、ここでは黄瑞香、すなわち和紙の原料とする沈丁花科のミツマタを特に指している。春に黄色の花をつける。

C　蟬の羽よりも軽く、羅紗よりも薄い。黒い糸のような罫線が引かれており、それがまっすぐであったり、斜めになっていたりする。文人は紙が高価だと心配する必要はない。淡黄色の瑞香花があちこちに植わっている。

D　紙を造るに竹を以てせず、構を用い楮を用いるの法は、中土に同じ。更に芫花・蕘花・瑞香花を用いて製る者有り。瑞香は或いは黄或いは白、皆な製るべし。蕘花を以て製る者は、雁皮と名づく、皆な至だ薄くして極めて靱し、色は潔白にして繊毫の垢無く、之を以て碑帖を鉤摹すれば、実に上品なり。余又た人の言えるを聞く、凡そ樹皮草根は、之を熬りて漿と成す者は、多く紙を造るべしと云う。近ごろ西法に仿い、復た敗絮を以て之を為す。使東雑詠の詩註に曰く、敗絮は、機器もて揉砕熬爛すれば、其の白くして茸なるを視る、水を用いて調匀し、機に由りて之を出す、機は輪遞して転じ、漿を瀉して幅を成し、腐れる者は新たに、厚き者は薄く、湿れる者は乾き、頃刻して即ち就る。堅緻なること雪の如しと。

E　①**構**　梶の木。樹皮が和氏の原料となる。　②**楮**　樹皮を和紙の原料とする。　③**芫花**　ふじもどき。中国原産で薬用にも用いられる。　④**蕘花**　黄雁皮。花は白色、淡黄色。樹皮を紙の原料とする。　⑤**鉤摹**　輪郭をなぞって模写する。籠写し。　⑥**漿**　どろどろとした濃い液体。　⑦**使東雑詠**　何如璋が日本駐在中に著した詩集。其五十七首に「経緯　機に当り尚お未だ分かたず、蛮箋　幅幅　終に紋を成す。敗絮をして新様に翻らしむるに任せ、過眼　空しく裁つ一段の雲」と詠じ、その自注に「東

人　西法に倣い紙を造る。広く敗絮を収め、機を以て揉砕熬爛す。其の白くして茸なるを視るや、復た水を用いて調匀し、機に由りて之を出す。機輪　遞るがわる転じ、漿を瀉ぎ幅を成す。腐れる者は新たに、厚き者は薄く、湿れる者は乾く。小頃にして即ち就り、堅緻なること雪の如し。製造の巧みなること、真に朽腐を化して神奇と為すなり」（『何如璋集』天津人民出版社、二〇一〇）とある。⑧茸　芽吹いたばかりの草やうぶ毛のように、細くて柔らかいさま。宋玉「小言賦」に「毳末の微蔑なるよりも繊やかにして、茸毛の方に生ぜしよりも陋し。」　⑨調匀　ととのえること。調均に同じ。　⑩機　ここでは紙漉きに用いる簀桁のことを指すか。　⑪輪遞　順番にかわるがわる。　⑫瀉漿　瀉は注ぐ意。簀桁に濃い液体を注ぎこんで紙を漉くこと。

F　紙を造るのに竹は用いない。構や楮を用いる方法は、中国と同じである。さらに芫花、蕘花、瑞香花でつくるものがある。瑞香は黄色や白色があるが、いずれも作ることができる。蕘花でつくったものは雁皮と呼ばれるが、いずれも非常に薄いが極めてしっかりしていて、色は真っ白で、少しの汚れもない。これで碑帖の輪郭をなぞれば、実に上品である。また私が人に聞いたところによると、凡そ樹皮や草の根は、これを水で煮詰めると漿になり、多くは紙を作ることができるという。近頃は西洋のやり方にならって、くず綿で紙を作る。『使東雑詠』の詩の注に、くず綿は、機器で揉み砕いて煮崩れるほどに煮ると、白くて細く柔らかくなっていくのがわかる。水でむらのないように均しくととのえたら、紙漉きの簀桁でこれを取り出し、簀桁を順番にかわるがわる動かして、漿を漉いて一幅の紙とし、どろどろになっていたものを新しい紙とし、分厚かったものを薄くし、湿って水気を含んでいたものを乾燥させ、しばらくするとできあがる。その丈夫で細緻なさまは雪のようだ、とある。

G　『日本国志』巻四十「工芸志」の「紙」の条に次のように見える。

造紙不以竹、用構用楮之法、同於中土、更有用芫花、蕘花、瑞香花製者、瑞香或黄或白、皆可製。以蕘花製者名雁皮紙、至薄極靱、色潔白無纖毫垢、以之鉤摹碑帖、実上品也。近倣西法、多以敗絮為之。聞樹根草皮蒸之成漿者、均可造紙。紙名至多、不可勝録也。

（以上、林　香奈）

（本稿は科学研究費基盤研究C（課題番号 22K00366）による研究成果の一部である。）

（はやしかな・京都府立大学教授）
（りゅうちん・南開大学教授）